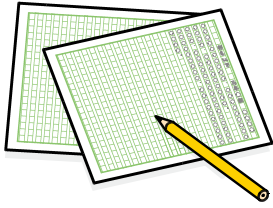


成瀬の風

東成瀬村立東成瀬中学校
学校報：N022 作成者：伊藤
発行：令和2年10月16日(金)



郡市読書感想文コンクール 杉山さん 特選！

☆ 10月14日(水)、湯沢市雄勝郡読書感想文コンクールの審査が行われ、2年杉山さんの作品「生きる『ものさし』」が『特選』に選ばれました。杉山さんは昨年も同賞を受賞。今年は、向田邦子さんが書いた「父の詫び状」を読み感想文を書きました。本作品は秋田県コンクールに出品されます。

生きる「ものさし」

生活していて分からないことがたくさんある。それは方程式や気体の性質とかとは別に存在する。例えば、人の年齢が分からない。あるとき一人の人物について話していた。母に「何歳くらいの人だった。」と質問されたが答えられなかった。人の歳なんて顔を見ただけで分かるものだろうか。三十代にも五十代にも見えた気がする。誰かが六十代だと言えばそれで納得してしまうだろう。他にも、一キロメートル歩くのにどれくらいの時間がかかるのか、ご飯を電子レンジで何分温めればいいのか、あの家は築何年くらいの家だとかそんなことが私には見当もつかないのだ。でも大人は分かっている。そんなのが経験の差だというのは当然に理解していることなのだが、自分には不思議で仕方ない。

そんな「数値のものさし」が理解できない生活のなかで手にした本、それが向田邦子の「父の詫び状」だった。教室の本棚の本を全部読破しようと思って手に取った本の一つだ。

文を読むのはそれほど得意ではない。読み始めてから夢中になってしまえばじっくり本と向き合えるのだが、そこにたどりつくまでが難しい。ミステリーをラストから読んでしまうこともある。しかし、エッセイとなれば話は別だ。自分のことを語る筆者が、普段私自身が感じながらも表現できない気持ちや考えを言葉で示してくれているかもしれない。生活に潜む何気ないことを新しい視点で見せてくれるかもしれない。本の中でも好んで手に取るジャンルだ。この「父の詫び状」にもそんなことを期待して、一ページ目から読みはじめた。

「父の詫び状」という題でありながら一篇目が伊勢海老の話題から始まったので、次のページをめくるころには私の中からそのタイトルの印象は抜けてしまっていた。その海老が手元から離れ玄関に立ったとき、作者の記憶は子どもころに戻るのだ。

向田さんは「玄関先で父に叱られたことがある。」と始める。私の父はあまり怒らないがそれくらいなら私にもある、そんなことを思いながら読み進めていく。すると、その内容は私が当然のように用意していたルールを外れていくようである。そもそも向田さんは、「叱られた」ときの話ではなく、「玄関で」叱られたときの話をしているようだった。しかも、それでどうだったとかいう語りは特にないのだ。私だったらこんな風に父に叱られたらショックでたまらないだろう。だんだんと向田邦子という人のイメージができていきこの話の筆者として認識してきた感じた。

家族を怒鳴り、自分の母親にさえ高声を立てる父。なのに外面はいい父。常に自分が特別扱いされていないと気が済まない人だったに違いない。今の私を基準にしても、とても考えられない生活だと思った。読み進めながらも、さぞ不自由だったに違いないと、そう思うのだが、同時に疑問が生まれてきた。

大人になって昔を語る向田さんは、そんな父に腹が立ったり、癩癩持ちと表現したりしながらも、「父はこの姿で戦ってきたのだ。」と父への愛しさというか尊敬というか、私には表現できないような優しく、顔のほころぶような一面を見せることがある。私は向田さんのそんな語り口に対して「なぜ」と思ってしまう。私が昭和の父親像というものを知らないからだろうか。中学生で、日常的に父に怒られたりしたことのない私には、こんな風に怒鳴られたら、何年も根に持ってしまう自信がある。でもそんな風に思ってしまうのは私が子どものままだから、また子どもの目線でしかモノが考えられないからだろうか。私とは偲ぶ「過去」の範囲が違う大人たちからしたら、頑固で人間くさい父親像に家族への愛を感じるのかもしれない。微笑ましくさえ思うのではないだろうか。

大人だったらどう思うかなんて考えてしまう。きっと子どもころの向田さんも同じだ。父に何か言われるたびに、その意図を、父の心情を、くるくる頭を働かせ考えたに違いない。

大人と子どもは違う。でも、大人は子どもであり、子どもは大人なのだと思う。向田さんは過去の自分や家族の記憶を掘り起こし、それを磨かないまま並べたり、遠くから見たり、ときには新しい色

を塗ったりしながら文に書き起こしたのだ。

私は将来、過去の自分と、姉弟と、母と、そして父を、どんな気持ちで思い返すのだろう。それはきっと大人になって分かる新たな「心のものさし」を基準にしたもので、今とは違うものだ。

私でもわからない私のこと。それを親は感じ取れるのかもしれない。暗示のようなものな気もする。子どもだから分かることがあり、大人だから分かることがある。父は私のことをよく知っているけれど、父が私の「心のものさし」を持っているわけではない。だから私たちは影響を与え合うのだ。

《書名》父の詫び状

《著者》向田 邦子

《発行所》株式会社 文藝春秋

☆ 向田 邦子（むこうだ くにこ） 昭和4年11月28日生まれ
昭和56年8月22日没

テレビドラマ脚本家、エッセイスト、小説家。第83回直木賞を受賞した。ホームドラマ作品の脚本家として現在も知名度は高く、『時間ですよ』『寺内貫太郎一家』『阿修羅のごとく』といった人気作品を数多く送り出した。全盛期である1970年代には倉本聰・山田太一と並んで「シナリオライター御三家」と呼ばれた。

※ 中学校2年生の国語教科書にも、向田作品が掲載されています。